

夜

夜中に突然目が覚めた。それは尿意ではなく、突然わたしの両目が開いた。  
自分の携帯を探すため、適当にベッドの周りに手を伸ばす。

「あった」

携帯のひんやりとした冷たさが指先から伝わる。  
携帯を開くと真っ暗な部屋に突然強い光が入った。  
わたしは眩しくて目を瞑り、ゆっくりと目を開けて時間を確認する。  
携帯のディスプレイには2時57分と表示されている。  
なんだか嫌な時間に起きてしまったなと苦笑いしたい思いだった。  
時間はもう把握したので携帯を閉じようとした瞬間に携帯が鳴った。  
突然の音楽に驚き、わたしの身体は跳ね、わたしの口からは高い悲鳴が出た。  
一体こんな時間に何なんだと少し腹が立ちながらメールボックスを開く。

「誰・・・？」

知らないアドレスからだった。  
本文には「こんばんは」と一言だけ書いてあった。  
無視しようと携帯を閉じて毛布に包まって再び寝ようと目を閉じた。  
携帯を閉じてから30分くらいは経ったと思う。  
わたしは寝たくて仕方がないのに、脳はそれを拒否した。  
睡魔がわたしの元になかなか訪れようとしないのだ。  
もう活動時間は終わりですよー！眠ってもいいんですよー！と直接脳に訴えたかった。

中々眠れないせいで、わたしはただ時間を無駄に過ごしているだけだった。  
一言で言えば暇なのだ。  
携帯を再び開き、さっき来たメールをもう一度読む。  
少し考えたその後に、このメールに返信することを決めた。  
もし返信が返ってくれば十分な暇つぶしになるだろうと思い、軽い気持ちで「こんばんは」と同じ文を返した。

送ってから5分も経たない内に返信が来た。  
正直、相手も悪戯のつもりでわたしにメールしたのだらうと思っていたので返信が来たこ

とに対して驚いた。

「返信して下さったのですね。嬉しいです」

丁寧な言葉遣いだなと思った。  
早速わたしも返信しよう。

「どうしてわたしのメールアドレスをご存知なんですか？」

「眠れなかったので、適当にメールアドレスを入力したらあなたに届いたんです」

「そうなんですか。でもそれってあなたの暇を潰すための行為ですよ？いきなり来たメールの着信音で起きたり、驚く方がいるかもしれないとお考えにならなかったんですか？」

あからさまな皮肉を込めて返信する。わたしってこんなに生意気だったかな。

「すみません。まさか届くとは思っていなかったの。そんなことよりもこれも何かの縁です。少し語らしましょう」

このメールを見た瞬間、相手の図々しさに悲鳴を上げそうになった。  
私の皮肉を込めたあんな憎たらしいメールをなかったかのようにするメールの相手が不思議で仕方がなかった。  
逆にそんな性格が羨ましいとさえ思ってしまった。

「あなたはきっと空気が読めずに浮くタイプでしょうね。そして図々しい。まあいいです。あなたの暇つぶしに付き合っただけでも」

「ありがとう。私は由紀。貴女は？」

お前は一体何様なんだという返信がくるかと思いきや、感謝された。  
相手の気まぐれのせいでわたしが迷惑したというのに、相手の寛大な心に対してわたしが申し訳ない気持ちになった。

そこからわたし達はお互いに好きな音楽や映画の話をして盛り上がった。  
驚いたことに、好きな音楽や映画がほとんど一緒なのだ。  
何でも好きな話が出来て嬉しいと由紀さんに言うと、わたしも言ってくれて嬉しかった。

「由紀さんは何の仕事をしているんですか？」

彼女が何の仕事をしているのか興味があったし、話題が尽きそうなので話を変えた。

「薬剤師の仕事をしているの」

「え！わたし、薬剤師になるのが夢なんです」

まさか由紀さんが薬剤師だなんて！これはもう運命としか思えなかった。

「やっぱり？なんだか趣味とかが合うからあなたの将来の夢が今のわたしの職業かなあと  
思ったら当たってた」

まるで「わたし」とメールしているような錯覚だった。

わたしがもう一人いて、会話をしたらこんな感じなんだろうなと思った。

「両親は反対していないの？」

何故、由紀さんがそんなことを聞いたのか分らなかった。

返信しようとする文字を打つ手が震える。

「母は賛成してくれているんですが、父が反対しているんです。お前には無理だって。わたし、悔しくて仕方がないんです」

友達にさえ将来の夢を明かしたことは無いのに、由紀さんには何故か全てを話してしまう。  
それはわたしと似ているからだろう。

「わたしも反対されていたのよ」

初めは最悪な印象しかなかったのに、話しているうちに由紀さんがしっかり者である誌的な女性だと気付いたから、彼女の両親も賛成しただろうと思っていたのに意外だった。

「由紀さんが反対されていたなんて意外です」

「そう？わたしもあなたと一緒にことを言われたわ。お前には無理だから別の仕事をしろ

って。何度も言われて悔しくて毎日泣いていた」

「わたしは今、未来の自分とメールしているような気分です」

「もし、わたしが未来のあなただったら安心して。あなたは確実に薬剤師になれる。試しに朝起きたらお父さんになりたい理由を言ってみたら？」

由紀さんはわたしに安心と未来をくれたような気がして携帯の画面に涙が落ちた。袖を使って画面を拭くが次から次へと涙で濡れる。

「ありがとうございます。由紀さんに話して良かった。言ってみようと思います」

「わたし、嘘は言わないからね」

「それじゃあ、わたしは絶対に薬剤師になれるですね」

「必ずね。だから諦めないで。わたし、あなたと一緒に仕事がしたいから」

由紀さんと一緒に仕事ができたらどれ程楽しいだろうと想像したら笑みがこぼれた。もしも薬剤師になれば、あなたのおかげで夢を叶えましたよ。憧れの薬剤師になりましたよ。と直接言おうと心に決めた。

「わたしもしたいです。絶対になりますから。だから、わたしのこと待っていてくださいね」

一緒に仕事をするだなんて無理に近いことなのに、何故か一緒に出来る気がした。

「勿論。楽しみにしてる」

メールを読んだ後に時間を確認すると、四時半を過ぎていた。今日が休みなら良かったのにと強く思ったのは初めてだ。

「すみません。今日学校があるのでそろそろ寝ます。本当にありがとうございました。最初の方に送った生意気なメールに関しては反省しています。ごめんなさい」

「そんなの気にしてないから。大丈夫。学校頑張ってね。こんなに遅くまでわたしに付き

合ってくれてありがとう。あなたと色んな話ができ嬉しかった。それじゃ、おやすみなさい」

メールを読んだ後に、由紀さんに言うつもりでおやすみなさいと声に出して言った。目を瞑ると直ぐに睡魔がやってきた。

朝の七時にセットしてある目覚まし時計が煩く鳴る。それはわたしを怒鳴りつけているような音なので、もう少し優しく起こしてよと目覚ましに言いたい。

重たい目蓋を出来るだけ開けて携帯を開ける。

夜中に行った由紀さんとのメールのやりとりを確認するためメールボックスを開く。

由紀さんからのメールを読んでいると元気が出た。

これから先、辛いことがあっても彼女のメールがあれば何でも乗り切れる気がした。

制服に着替えてリビングに行く。

わたしが席に着く前に父はいつも先にいる。案の定、今日もそうだった。

父は難しそうな顔をして新聞を読んでいた。

新聞で世の中の動きを見るよりも、わたしはテレビで見るほうが好きなので新聞は読まない。

「おはよう」

「ああ」

一日のわたしと父との会話はこの挨拶だけで終わる。

父は基本的にわたしに関しては無関心なのだ。

それなのにわたしの夢を邪魔する父を心の底から憎んだこともあった。

それ程、わたしは薬剤師に対して真剣なんだ。

「あ、おはよう。食パンはもう焼いているから」

「うん。ありがとう」

母は朝から忙しい。わたし達のお弁当と朝食を作らなければならないからだ。

わたしを支えてくれる母にはいつも感謝している。

食パンにバターを塗って齧る。サクッといい音がした。  
食パンを食べ終わった後に牛乳が入ってあるわたし専用のカップに手を伸ばす。  
カップに口をつけながらわたしの前に座っている父を見る。  
いつ、わたしがなりたい理由を打ち明けようか迷った。

「なあ」

じっと見続けていると父がわたしに語りかけてきた。  
滅多に彼からわたしに話しかけることはないのに、何か怒られるのではないかと不安が過ぎった。

「お前は、どうして薬剤師になりたいんだ？」

わたしが言おうと思っていたことを父が聞いてきた。  
普段、わたしと目を合わせない父が、真っ直ぐにわたしの目を見て聞いてきた。

「いきなりだね」

「……………」

父はわたしが何故、薬剤師になりたいのかだけを聞きたいようだった。  
母にはなりたい理由を言っていたのだが父には言っていなかった。  
話す時間と勇気がなかったからだ。

ぐっと拳に力を込める。  
由紀さんから貰った言葉を思い出す。頑張れと自分に言い聞かせた。  
口を開いて、思っていることを父に伝えるんだ。行け、わたし。

「ち、小さい頃からずっと憧れていたから……」

物心ついた頃から、わたしの夢は薬剤師しかなかった。  
ずっと見続けていた。

「お父さんの仕事をしている姿がとてまかつこよくて、患者さんに薬を渡すときの表情が  
凄く優しそうだから」

父は目を見開いて驚いた様子だった。

まさか、わたしが薬剤師になりたい理由が自分のことだと思ってもみなかったのだろう。

「最初はまだ、かっこいいという理由だけだった。でも、人の役に立ちたいと思い始めたから」

「それなら別に薬剤師じゃなくても…」

「優しい顔をしたお父さんと仕事がしたいから」

いつか言わなければいけないことは分かっていたが、恥ずかしくて言えなかったことがやっと言えた。

そして、その言葉を聞いた数秒後に父の目はゆっくり潤んでいき、涙がカップに入って牛乳を揺らす。

「な、なんで泣いてるの…」

父が泣いているところを見たことが無かったわたしは動揺した。

今日は珍しいことがよく起こる。

母の方をみると、母は微笑んでいた。

「お前が俺をそうやって見ていたなんて全く知らなかった」

「そうだと思う」

「薬剤師になるために俺は大変苦労した。だから、お前にはさせたくなかった」

「うん」

父がわたしのためにそう思っていてくれたのだと分って嬉しかった。

「でも、俺の勝手でお前の夢を潰そうとしていたんだな。ごめんな」

父の口から謝罪の言葉が出たのも珍しくて、何だか幻を見ているような気分になった。

「俺もお前と一緒に仕事がしたい」

父から由紀さんと同じ言葉を聞いたとき、わたしの目は涙を沢山落とした。

父が薬剤師になることを認めてくれたおかげで、爽やかな気持ちで家を出た。  
ゆっくりと学校に向かっている最中に由紀さんからメールが来た。

「おはよう。お父さんは賛成してくれた？」と書いてあるのを見て、由紀さんは超能力者だだと確信した。

「おはようございます。お父さん、認めてくれました」

「やっぱり？なんだかそんな気がしたからメールしてみたの」

「由紀さんは絶対に超能力者ですね」

「超能力者かもしれないし、将来のあなたかもしれない」

「あ、それなら未来のわたしの方がしっくりきますね。もしも、由紀さんが未来のわたしならお父さんがいつ、賛成してくれるか分ったかもしれませんね」

「あなたが思うように想像していて。あなたが薬剤師になるのを楽しみにしておくから。じゃあね、由紀ちゃん」

そのメールを最後に由紀さんからのメールはもう来なくなった。

由紀さんは初めてわたしの名前を呼んでくれた。

このときになって、初めてわたしの名前が由紀さんと一緒だということに気付いた。

どうして気付かなかったのかは分らない。

ただ、由紀さんは本当に未来のわたしで、父に認めてもらえなかった辛い時期のわたしを救うためにメールを送ってきたかもしれないと、わたしの中でそう整理した。

未来ではタイムマシンでも出来ているのかと思ったら口元が緩んだ。